いたくら

2023
09

ITAKURA HOUSE

特集

信州の板倉

風土が育む木と暮らし

有賀製材所
こだま建築舎
里山建築研究所
しみず建築工房
矢沢設計

いたくら ITAKURA HOUSE
2023年 No.9

◆特集 信州の板倉
風土が育む木と暮らし

01 case 1 木曽の山並みを望む家
「T邸」（長野県木曽郡）

08 case 2 夏の別荘から定住へ。ペチカで暖まるカラマツの板倉
「塩野の家」（長野県北佐久郡）

14 case 3 自家の山の木で建てた、趣味や集いの離れ
「MSガーデンハウス」（長野県駒ヶ根市）

17 case 4 骨太の板倉に蓄熱。ペチカで暖かく暮らす
「金井邸」（長野県上伊那郡）

20 case 5 エネルギーを自給する板倉を目指す
「矢沢邸」（長野県飯田市）

23 case 6-1 カラマツ、アカマツ、ヒノキを活かす、製材と板倉の家づくり。ペチカ導入の先駆者
「有賀製材所」（長野県伊那市）

28 case 6-2 梁はカラマツ、柱はヒノキ、床はアカマツ。端材はペチカの薪。地域材を活かした家と暮らし
「M邸」（長野県伊那市）

板倉小屋百景

32 自由を楽しむ、暮らしの余白としての小屋
「清須のITAKURA BASE」（愛知県清須市）

34 奥会津の地域性を色濃く反映、かつ汎用性の高い仕様に
「福島県立博物館・板倉のベビーケアルーム」（福島県会津若松市）

35 板倉の家は私達がつくります

特集

信州の板倉

風土が育む木と暮らし

日本アルプスの山々に囲まれた信州長野県。標高が高く山間の地形。
そこはカラマツ、アカマツ、クリ、そして木曽ヒノキ等の
多様で豊かな森林資源に恵まれている。
また古くからそれらの木材を活かした板倉の宝庫でもある。
今日その板倉が現代の生活にあった技術として生まれ変わる。
寒冷な冬を暖かく暮らすための暖房装置や断熱構法の技術開発や
小さく暮らす知恵が新たな板倉の可能性を開いている。

木曽の山並みを望む家

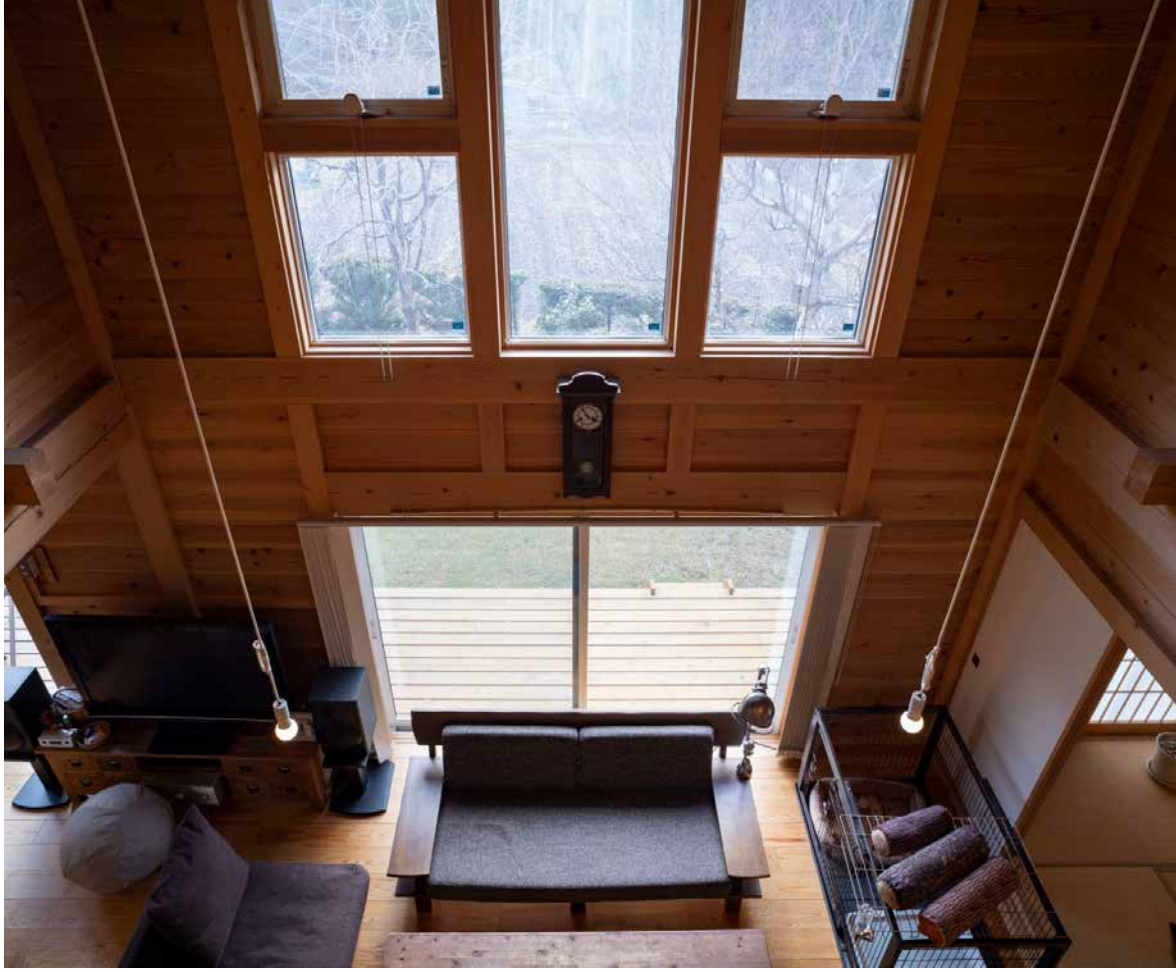
「T邸」（長野県木曽郡）

木曽の山々を望む美しい田園風景の中、
母屋に寄り添うように建てられた若い家族の住まいです。
架構に地元の古材を活用した、懐かしくも新しい板倉の家となりました。

文／安藤邦廣、花田裕士
撮影／齋藤さだむ

木曽ヒノキの大黒柱とクリ古材の美しい鴨居で構成された吹抜け。冬は薪ストーブを囲む暮らし。
左頁、上／2階階段ホールから広間を見下ろす。南側の大きな開口部で日光を取り入れる。
下／縁側からは遠く木曽の山が望める。

クリ、ヒノキ、マツと木曽の古材で組んだ
吹抜けの小屋組。



吹抜けの広間から続く食堂と台所は、落ち着ける空間。
左頁／骨太の板倉の空間に道具類が調和する。

東南に配した台所と食堂。
暮らしの道具に住まい手の美意識を感じる。

カラマツ、アカマツ、ヒノキを活かす、製材と板倉の家づくり。ペチカ導入の先駆者

有賀製材所（長野県伊那市）

創業は1927年という有賀製材所。35年ほど前からは
地域の材の活用に努め、昔から地域で建てられてきた板倉と、
寒冷地に適した暖房としてペチカを取り入れた家づくりを始めました。
地域に根ざした製材と家づくりは、理に適ったものとなっています。

上／有賀製材所のある伊那市西箕輪は松本と飯田の中間に位置する。この地で昭和2年に創業した、歴史ある製材所だ。
下／製材所のスタッフが勢揃い。イランやインドネシア、ペナンと、出身国も多彩なスタッフが専門性の高い仕事に就いている

取材・文／平山友子　撮影／齋藤さだむ

上／製材所の内部。木材の乾燥は天然乾燥が基本。フローリングなどの人工乾燥はこだま建築舎（p14参照）に委託している。
下／伊那の山を望む製材所。丸太の６、７割は原木市場から仕入れ、３、４割は山から直接買う。林業者から情報が入るのだという。

カラマツ、アカマツ、スギ、ヒノキ、クリなど地域の材に精通。賃挽きも請ける昔ながらの製材所

右頁
上／工務店から賃挽きを依頼されたカラマツの丸太を３寸角の大引きに挽く。これだけの直径の丸太だと、芯去り材が取れる。
下右／製材するのはイラン人のダリューシュさん。一本一本異なる木目や、節の入り方に配慮しながら、木の良さを引き出すように挽く。
下左／挽き終えた大引き。芯去り材はねじれが少なく、強度が高い。カラマツはウッドショック以降、合板の需要が高まり価格が高騰した。

下／家１棟分の木材を、状態を見ながら１本１本台車で挽き、モルダー加工で仕上げる。昔ながらの製材所は地域材活用の要だ。

右上／代表取締役の有賀真人さん。1998年から有賀製材所の設計士として働き始め、父の後を継いで会社を率いるようになった。
右下／貯木場。「丸太から製材していると、これを隠してしまうのはもったいない。できれば無垢のままで使ってほしいと強く思います」。
左上／挽いた板は半年から１年くらい天然乾燥する。
左下／切端（せっぱ）も貴重な燃料。薪にして販売している。大鋸粉（おがこ）は畜産業者が引き取っていく。１本の丸太を余すところなく使い尽くす。

1本の丸太を余すところなく使い尽くす。端材はペチカの打ってつけの燃料に

伊那市西箕輪の有賀製材所は、工務店からの注文に応じた製品を販売するだけでなく、持ち込まれた丸太の賃挽きも行なっている。この辺りでは、自分の山の木で家を建てる人がまだいるのだそうだ。「昔はごく当たり前でしたよね。うちみたいに小さな製材所が各地にあって、伊那でも地域の木を製材して地元で使っていました」と、代表取締役の有賀真人さんは話す。年間の製材量は丸太で１５００㎥ほど。そのうちの６割がカラマツ、アカマツ、スギ。残りがヒノキ、クリ、サワラと広葉樹だ。中でも扱い量が多いのがカラマツとアカマツ。ちょうど70年生のカラマツを挽いて大引きにするところだという。直径30㎝は下らない丸太を台車に乗せ、３寸角の材を挽く。「昔は、カラマツはねじれるといって馬鹿にされていました。たしかに若い木はそうですが、大径木になると本当におとなしくなります。強度があるので横架材に適しています」。有賀さんはそう言いながら80年生の丸太から柾目取りした板材を取り出す。樹脂が多い木なので、木目がはっきりした強い表情を想像していた。しかし実際はスギのように上品で緻密な木目。しかもつややかだ。一方、アカマツは白くておとなしい表情。強度もあるので、有賀製材所ではフローリングや梁に加工することが多い。こうした木の風合いを損なわないよう、天然乾燥が基本だ。羽目板やフローリングは天然乾燥の後に70～80℃の人工乾燥機に入れている。最初から人工乾燥機を使うよりも色艶がよく仕上がるのだそうだ。

有賀製材所は製材だけでなく、建築の設計施工も手がける。小回りの効く地域の製材所がどんどん減っていく中、有賀製材所が存続しているのは建築部門を擁しているからだと有賀さんは言う。「製材所は電気代など月々の固定費や機械の維持に費用がかかります。林業界や大規模な製材所にはさまざまな補助金が入りますが、うちのように小さな製材工場は自助努力でやっていくしかありません。地域にどれだけ木があっても、製材所がなければ流通しなくなります。何とか踏ん張っていきたいと思っています」。もちろん、自社で請け負った建築の木材はすべて自社で誂える。

板倉構法の住宅は35年程前から手がけている。伊那では昔からクリ材の板倉が建てられていた。有賀製材所でも手がけることがあり、技法は習得していた。「当時は好景気で、黙っていても仕事が入りました。僕が子どもの頃の話です。うちでも米マツやソ連カラマツなどの外材を挽いていて、トレーラーで届いた丸太が山のように土場に積み上がっていた時期がありました。でも、地元にこれだけ木があるのに外国の木を使うことに両親は違和感を持っていたんですね」。近

有賀製材所が設計施工した住宅。もっともコンパクトなサイズのペチカを設置した。これだけで35坪の家の暖房をすべてまかなう。

梁はカラマツ、柱はヒノキ、床はアカマツ。端材はペチカの薪。地域材を活かした家と暮らし

M邸（長野県伊那市）

有賀製材所が設計施工した、ペチカを備えた板倉の住まいです。冬でも家中が温度差のない暖かさ、カビや湿気知らずという暮らし振りをうかがいました。

左頁
右上下／ペチカの裏側は寝室。ワンルームの室内の間仕切りの役割も果たしている。仕切りがない家の中は、どこにいても一定の暖かさ。ヒートショックの心配がない。外は氷点下でも、朝に焚いた余熱で夕方まで室内温度は20℃を下らないという。夜間も夕方焚いた余熱で朝まで暖かい。この家では掛け布団が不要になった。
左上／「丸窓がどこかにほしかった」という建主の希望で玄関に開けた。遠くの山を望むピクチャーウィンドウとなった。
左下／作業しながら眺望を楽しめるキッチン。この家の設計はほぼ建主の要望通りに。ペチカの位置なども建主が決めた。